

大学院派遣研修報告書

所属校	東京都立白鷗高等学校	氏名	中野達也
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	英語教育専攻 英語科教育コース
研究テーマ	L2 Word Recognition of Japanese Junior and Senior High School Students		

I 研究の概要（研究目的・内容・方法・成果等）

1. 研究目的

ある時、授業を担当している生徒の一人が、「dinosaur」の発音って/dáinəsɔ:/だって知ってた？私はずっと/dínasɔ:/ だと思っていたから、正しい発音で聞いたときに意味がわからなかったの。」と、友人に話しかけているのを聞いた。このことがこの研究のきっかけの一つである。確かに、授業中に音読をさせると、「patient」を/pátiənt/と読んだり、「incident」を/insáident/と読んだり、「allow」を/álow/と読んだりする生徒に出会うことがたびたびある。果たして、生徒たちは英単語の発音を正しく理解しているのだろうか、また正しく理解していない場合には、正しい発音を聞いたときに意味が分かるのだろうかという疑問が湧いた。

私たちが「単語テスト」を実施する場合には、その多くは紙面上に書かれた単語の意味を記述したり、日本語訳を見て英単語を書かせたりするのが一般的だろう。しかし、音声を聞いて、その発音から意味を選択あるいは記述させるようなテストはあまり行われていないのではないだろうか。

そこで、本研究では、「日本の中高生は、既習語について音声認知と視覚認知が等しくできるのだろうか」という主題の元、調査・分析を行った。その際の観点は次の6点である。

①中学校既習語について中高生の語彙認知に差はあるのか。②高校既習語について高校生の語彙認知に差はあるのか。③単語学習学年と、その単語の認知に差があるのか。④語彙認知は学習者の英語力と関係があるのか。⑤音声認知に影響を及ぼす単語に特徴はあるのか。⑥学習者はどのように単語を覚えているのか。

2. 研究内容

以上の点を調査するために、中学2年生から高校3年生までを対象に、「発音を聞いて意味を選ぶ単語テスト」と「つづりを見て意味を選ぶ単語テスト」を実施した。調査に参加した実験協力者は中学生 919 名、高校生 637 名である。

これらのテストは、Coady (1993)の主張する Sight Vocabulary と中野 (2005)が示した Audio Vocabulary に基づくものである。Sight Vocabulary とは、「その単語のつづりと一般的な意味が瞬時に認知されるような語彙」と定義されている。言い換えれば、一瞬目にしたときに意味が瞬時に分かる単語のことである。これに対するものとして考えられたものが Audio Vocabulary である。これは、「発音を聞いたときに意味が瞬時に分かるような単語」を指す。多くの語彙研究者が、語彙を知っていることの定義として、「つづり、発音、意味の3点が同時に身に付いていること」としているのに対して、私は必ずしもそうではないという立場をとっている。冒頭に紹介した生徒のように、つづりを見たら意味が分かっても、音を聞いた場合には意味が分からない場合もあるだろうと考える。Avery and Ehrlich (2003) も、聞いた音と見た文字とが一対一対応できない学習者がいることを指摘している。

今回は、中学・高校で既習の単語について、音声と視覚の両面からテストを実施した。その際用いた教科書は、共に東京書籍株式会社の New Horizon English Course 1,2,3（以下、New Horizon English Course と表記）と Prominence English I である。

3. 研究方法

WORT (Word Recognition Test)と名付けた「語彙認知テスト」を作成し、上記の中・高生を対象として調査を行った。「発音を聞いて意味を選ぶ単語テスト」と「つづりを見て意味を選ぶ単語テスト」は次のように作成した。上記教科書から無作為に抽出された単語について、発音とつづりの両面からテストを実施した。対象となった単語の数は、中学既習語については、中学2年生 20 語 (中1 既習語)、中学3年生 40 語 (中1, 中2 既習語)、高校1年生 60 語 (中学3年間既習語) である。ただし、新学習指導要領が導入されたことにより、高校2年生は中学2, 3年既習語 40 語、高校3年生については中学3年既習語 20 語のみを分析の対象とした。高校既習語については、高校1年生と3年生を対象に 20 語をテストした。調査に参加した実験協力者は中学生 919名、高校生 637名である。

「発音を聞いて意味を選ぶ単語テスト」と「つづりを見て意味を選ぶ単語テスト」で使用される単語は共通であるが、単語の提示順と選択肢の配列が異なっている。試験監督者と受験者の混乱を避けるために、「発音を聞いて意味を選ぶ単語テスト」はあざぎ色の用紙に、「つづりを見て意味を選ぶ単語テスト」は白い用紙に印刷した。

中学生は全員が New Horizon English Course を使用しているが、高校生については実験協力者全員に対してテストを実施したあと、New Horizon English Course をしていた生徒のみを抽出して分析を行った。

生徒に対しては次の3つの調査が行われた。なお、3つの調査は「発音を聞いて意味を選ぶ単語テスト」→「つづりを見て意味を選ぶ単語テスト」→「アンケート」の順で実施した。

3. 1. WORT について

3. 1. 1. 「発音を聞いて意味を選ぶ単語テスト」 WORT-AV (Word Recognition Test based on audio vocabulary)

テストのための音声音源はいずれの場合も教科書準拠の CD からカット・アンド・ペーストして作成した。音声は標準的なアメリカ英語を話すプロによる録音であり、どの生徒も普段使用している音声教材と同一のものである。単語の提示は1回のみである。提示される単語と単語の間隔は約5秒間である。

3. 1. 2. 「つづりを見て意味を選ぶ単語テスト」 WORT-SV (Word Recognition Test based on sight vocabulary)

できるだけ音声提示と同じ状況を作るため、単語は紙面で示すのではなく、プレゼンテーションソフトを使用して、単語をスクリーン上に表示できるように工夫した。実施学校の設備を考慮して、スライドショーをビデオに録画したものと、CD-ROM 版の両方を用意した。単語はスクリーン上に4秒間提示され、その後消え、5秒後に次の単語が表示されるように作った。

3. 1. 3. アンケート

中学校で New Horizon English Course を使っていた生徒を特定することと、生徒の英語学習歴を調べる目的でアンケートを実施した。

4. 分析結果

①中学校既習語について中高生の語彙認知に差はあるのか。

中学2年生に関しては、全体としては統計上有意差が見られたが、詳細に分析した結果、実施4校中3校では統計上有意差が見られなかった。つまり、全体としては音声認知が視覚認知に比べて困難であるという結果が出たが、詳細分析の結果から、中学2年生では音声認知も視覚認知もほぼ同レベルでできていると考えられそうである。中学3年生に対して実施した分析では、いずれの学校でも有意差が見られた。音声認知が視覚認知に比べて困難であるという結果が出た。

高校生に対しての分析では、New Horizon English Course を使用していたという生徒が少なかったことと、

途中で新学習指導要領が導入されたことにより、同一条件下で分析するのが非常に困難であった。しかし、その条件下で得られた結果は次のとおりである。高校生全体としては、1年、2年、3年共に正答率は非常に高かったが、統計上は両テスト間に有意差があり、音声認知が視覚認知に比べて困難であるという結果が出た。

②高校既習語について高校生の語彙認知に差はあるのか。

高等学校で学習した単語については、両テスト間に統計上有意差が見られた。正答率も中学既習語に比べて低めであった。高校既習語になると、正答率は9割を下回り、両認知間の差はますます開いていくようである。これは、語彙の難易度が上がったことや、高校では音声学習の割合が減ったからではないかと考えられる。

③単語学習学年と、その単語の認知に差があるのか。

中学1年既習語については、中高生共に、音声認知と視覚認知はほぼ同様であった。ところが、中学2年既習語になると、正答率も下がり、得点の開きも大きくなった。これらのことから、語彙認知について中学2年生である変化が起きているのではないかと考えることができそうである。

④語彙認知は学習者の英語力と関係があるのか。

個人情報保護法の施行以来、ますます生徒の成績等に関する情報が得にくくなり、この観点に関する調査は困難を極めた。今回は、高等学校進学時に必要な偏差値と、高校で行われた英語Iの定期考査の結果を英語力の指標とした。その結果、学習者の音声認知率と視覚認知率が共に英語力と関係があることがわかった。これは、至極当たり前のことではあるかもしれないが、偏差値の高い者および定期考査の成績のよい者ほど、語彙認知力も高い。ただし、どんなに英語力の高い生徒でも、視覚認知に比べて音声認知が困難である傾向がみられた。

⑤音声認知に影響を及ぼす単語に特徴はあるのか。

学習者にとって音声認知に影響を及ぼす単語に特徴がいくつか見られた。特に、音声認知に関しては1音節語の認知が困難な様子である。また、語末音がTで終わる、'whole'、'bottle'、'role'などという単語の認知が非常に難しいようである。

⑥学習者はどのように単語を覚えているのか。

アンケート調査の結果から、CDなどの音声教材を使いながら単語を学習している生徒は中高生の全体の約11%に過ぎないことがわかった。いずれの学習者も音声を通した単語学習があまり行われていないようである。視覚認知に比べて音声認知が困難である理由の一つとして、音声面のインプットが少ないことを指摘できる。

5. 考察

上記の分析の結果、全体的に視覚認知に比べて音声認知が困難である傾向が見られた。これは、学校現場で教えている私たち教師にとっては嘆くべき結果であろう。しかし、こうした研究の積み重ねによって、英語教育の問題点が明らかになり、その問題に対する解決策を考えることができるという点で、今回の研究は非常に有意義であったと思っている。

特に、語彙認知に関して、中学2年生で何かの変化が起こっていることが確認できたことは非常に大きな教育的示唆であろう。中学2年生で語彙学習につまずく生徒がいるということが推測できたということは、その段階で何らかの手だてを講じてやれば、語彙学習に困難を感じている生徒たちを救済できるのではないかと思う。

本研究は、中学・高校の連続的な研究を主体としたものであったが、特に高校生の実験協力者を十分に集められなかったことや、中学生と高校生が同じ集団に属していなかったことから、必ずしも目的を果たすことはできなかった。今後、問題点を解決した上で、さらに研究を継続していく必要性を感じている。

II 学校等における研修成果の活用計画（授業活用・研修会計画）

1. 授業活用

研修の成果はもちろん学校教育現場にフィードバックしたいと考えている。まず、生徒への還元という意味で

日常の授業の中で活動として取り入れていきたい。

高等学校既習語に関する調査の結果の中で、テストの正答率は9割を下回り、両認知間の差はますます開いていくようだと言った。また、その原因として、語彙の難易度が上がったことや、高校では音声学習の割合が減ったからではないかと考えられるとも述べた。しかしながら、個々に分析していくと、学校によってその差は異なっている。両テスト間の素点の差があまりない高等学校もある。それらの学校の授業形態について聞き取り調査を行った結果、これらの学校では音声面の指導が行われていることが分かっている。確かに、語彙の音声指導に特化して授業時間を割くことは現実的には非常に困難である。しかし、オーラル・インタラクションなどを通して、教師の発音を聞かせたり、教師からの発問に英語で答えさせたり、という活動はすぐに導入できる手だてだろう。また、教科書を音読するというのも、必要最低限の活動であると同時に、思いの外効果を上げることがこれまでの先行研究からも分かっている。ことに、受験指導を中心に行っている学校では、読解が中心となり、音読に時間を割くことが少ないかもしれない。しかし、教科会等で十分に話し合いをして、授業のあり方を再確認したいものである。

また、今回のテストで使用したプレゼンテーションソフトを使ったスライドショーによる単語導入は、教室環境さえ整えば今すぐにでも活用できる方法である。研究のみに終わらせることなく、積極的に授業でも利用していきたいと考えている。

2. 研修会

大学院での研修はまもなく終了するが、研究はむしろ始まったばかりである。東京学芸大学大学院の英語科教育コースには PGT と呼ばれる、大学院修了者を対象とした研究の場が用意されている。時間を作って、ぜひ参加したいと考えている。また、研修の成果を還元するもう一つの方法として、他の教員と情報を共有し合いたいと思う。学会での研究発表もその一つである。大学院で研修する中で、いくつかの学会に参加する機会を得た。これまで学会といふとかなり敷居の高いものだと思っていたが、それは単なる先入観に過ぎなかった。学会には、大学の先生方だけではなく、中学・高校の他、最近では小学校の先生方までが参加している。広い範囲で情報交換が可能である。今年は、関東甲信越英語教育学会の会場として、東京学芸大学が予定されている。8月に行われる学会ではぜひとも発表をしたいと思う。また、全国英語教育学会も同時期に予定されている。ここでも積極的に発表していきたいと考えている。

(本報告書における参考文献)

Avery, P. & Ehrlich, S. (2003). *Teaching American English Pronunciation*. New York: Oxford University Press.

Coady, J. (1993). Research on ESL/EFL Vocabulary Acquisition: Putting It In Context. In T. Huckin, M. Haynes, J. Coady (Eds.) *Second Language Reading and Vocabulary Learning*. Norwood, N.J. : Ablex Publishing Corporation.

Nakano, T. (2005). *Do junior high school students have both Sight Vocabulary and Audio Vocabulary equally?* Unpublished Term-paper. Tokyo: Tokyo Gakugei University.

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	東京都立白鷗高等学校	氏 名	中野達也
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	英語教育専攻 英語科教育コース
研究主題	L2 Word Recognition of Japanese Junior and Senior High School Students		
1 所属校での成果活用	<p>私は、大学院で学んだことの成果はまず目の前にいる生徒に還元されるべきであると考えている。そのまず第一が日々の授業である。</p> <p>大学院で学ぶ前の授業と修了後の授業を比較したとき、自分自身の授業の組み立て方が大きく変わったことに気づく。これまでも、生徒のやる気を喚起し生徒が興味を持つよう考えて、様々な工夫を凝らして授業をしてきたことに何ら変わりはない。しかし、大きく変わったことは、「この活動が生徒にとってどのような意味を持ち、生徒のどの力を伸ばすのか」という点を常に考えるようになったことである。</p> <p>例えば、新出単語を導入するときにも、文字と音声と意味の3つが同時に関係づけられるように、単語と意味を書いたカードを授業中常に黒板に掲示しておき、折に触れて発音や意味の確認を行なうようになった。また、音読をするときには、ただ単にオウム返しになることのないよう、そして音読することで内容を頭に取り込むことができるように、Read and Look up はもちろんのこと、モデルリーディングから生徒のリポートの間にある程度の時間をおいて負荷をかけながら音読するなどの工夫をしている。</p> <p>また、大学院で学んだ理論を実践の中に取り入れるようになった点も変化のひとつである。例えば、Nation という語彙研究者が、英文を読むときに未知語の意味が推測可能となるためには、全体の語彙の95～98%を知っていることが望ましいと言っている。神戸大学の石川助教授の調査によれば、大学入試問題の語彙の90%をカバーするためには約4500語を知っている必要があると言う。このような、実証研究の結果を具体的な数字と共にかみ砕いて生徒に説明することにより、生徒たちの単語習得に対する取り組みも変わってきた。</p> <p>大学院で学んだことを勤務校の生徒に様々な形で還元することで、研修の成果を十分に活用しているものと考えている。</p>		
2 委員会・研修会での成果活用	<p>研修会や学会で研究の成果を発表することも、研修の成果を活用する手段の一つであると考えている。今年度は、これまでに下記の研究会および学会で発表する機会があった。</p> <p>平成18年7月15日（土）に獨協大学主催の獨協大学英語教育研究会において、「公立中高生の英単語認知」というタイトルで修士論文の内容について研究発表を行った。対象者は関東近郊の小中高校の教員および学生である。参加人数は150名程度であった。ここでは、追い認知について分析した結果、全体的に視覚認知に比べて音声認知が困難である傾向がみられたことを中心に発表した。学年別では、中学1年既習語は、中高生共に音声認知と視覚認知はほぼ同様であったが、中学2年既習語になると正答率も下がり、得点の開きも大きくなったことをデータと共に示した。これらのことから、語彙認知について中学2年生である変化が起きているのではないかという考察を述べた。一方、高校既習語については、正答率は9割を下回り、両認知間の差はますます開いていくようであると発表した。多くの質問やご意見をいただき関心を持って頂いた。小学校で英語教育に携わっている方から、小学校の感覚では当然音声の方が理解しやすいのではないかと思っていたというご意見を頂き、非常に興味深い内容であると感じた。</p> <p>また、平成18年8月19日（土）に東京学芸大学で開催された関東甲信越英語教育学会東京大会で、「日本の公立中高生の英単語認知～音声的認知と視覚的認知が等しくできるのか～」という題目で研究内容を発表した。語彙研究を専門とする大学の先生方から質問とアドバイスを頂くことができた。現在は、修士論文で用いた実験の追試と併行して、研究発表の際に頂いた助言に基づいて、改良版の実験を行う準備をしているところである。</p> <p>日々の研鑽を積む上でも、こうした研究会や学会で研究発表をする意義は重要であると考えている。</p>		

<p>3 成果を生かした研究授業等</p>	<p>今年度に入ってから研究授業の機会はないが、昨年度大学院在学中に第五学区の五英研の研究授業が白鷗高校に割り当てられ、他に2名の先生方と研究授業を行った。時期としては修士論文のための実験を行っている最中であり、データも出そろっていただけではないので、研究の成果を100%発揮できるような授業を行うことは残念ながらできなかった。また、進学校ならではの授業進行の速さから、他の教員と同一歩調で授業を進めなくてはならない関係上、大学院で学んだことを活用する余裕がなかったのも事実である。しかしながら、研究授業で特に配慮した部分は、自分の研究テーマとも重なる新出語句の導入指導であった。このときには、①「中学校既習語について中高生の語彙認知に差はあるのか」②「高校既習語について高校生の語彙認知に差はあるのか」③「単語学習学年と、その単語の認知に差があるのか」④「語彙認知は学習者の英語力と関係があるのか」⑤「音声認知に影響を及ぼす単語に特徴はあるのか」⑥「学習者はどのように単語を覚えているのか」という6つの観点から実験を行っているところであった。実験結果は出ていなかったが、経験的におそらく視覚認知に比べて音声認知が困難なのではないかという予想をたてていたところだったので、実験と同様の単語提示を試みた。具体的には、プレゼンテーションソフトで作成した新出語句を教室内に設置したノートパソコンで示しながら発音指導と意味指導を行った。この際、単語の提示は5秒間とし、Coardyの言う Sight Vocabulary として新出語句が定着することをねらった。その意味では、大学院で研究していることを合評会で提案するよい機会であったと考えている。</p> <p>研究授業を実施する際は、授業を行う者もまたそれを参観する者も、お互いを高めあおうとする真摯な態度が必要ではないかと痛感した。</p> <p>今年度は本格的な研究授業は実施されていないものの、管理職による授業観察や公開授業など、他の方々に授業を見て頂く機会は非常に多い。参観者のあるなしにかかわらず、毎時間毎時間が研究授業であるという意識を持ち、生徒と向かい合って授業をしているつもりである。日常の授業は派手さや目立った活動は少ないかもしれないが、その中で生徒が生き生きと活動し、生徒の英語力が定着し、その力が伸びるような授業をしてこそ、大学院で2年間学んだ成果を生かすことになるのではないかと考えている。</p> <p>また、生徒からのフィードバックはどんな研究授業の合評会よりも率直なものである。1学期末に実施した授業評価では概ね良好な反応があり、自分としては満足のいく授業を行うことができている。今後とも、常に目の前にいる生徒のことを忘れることなく、研修の成果を発揮して精進していきたいと考えている。</p>
<p>4 今後の活用計画等</p>	<p>成果の活用にあたっての基本的な考え方は、先にも述べたとおり生徒への還元である。今年度は高校1学年の学級担任であると共に、学年の英語の授業その他を計画推進する立場にある。大学院で学んだ知識やノウハウを活かして、コストパフォーマンスの高い、そして質の高い英語指導を行うために尽力したい。</p> <p>また、大学院の指導教官の「修了後も研究を続けて下さい」という言葉を胸に、研究心は忘れないようにしたいと思う。現在は、指導教官であった金谷 憲先生のもとで、P G T (Post Graduate Tutorial) というプログラムに参加している。これは、金谷先生のご厚意により、大学院修了後3年間の期間限定で、金谷先生のご指導を受けながら研究を続けることができるプログラムである。受講の条件として、毎年何らかの形で研究の成果を発表しなくてはならない。現在は、『高校で学習した語彙が入試問題をどれだけカバーしているか?』というリサーチクエスチョンを掲げ、所属校で使用している教材で学ぶ語彙が、どの程度大学入試問題をカバーしているのかについて研究を始めたところである。所属校で使用している教材は多岐に渡ることから、おそらくかなり高いカバー率を示すのではないかと予想される。このことを実証研究から明確にすることができれば、生徒や保護者に対しても、高校の授業の大切さを訴えかけていくことができるものと考えている。この研究の結果については、来年度の学会あるいは研修会の中で発表する予定である。</p>